

兵庫県立美術館開館 20 周年記念

李禹煥

20th Anniversary of Hyogo Prefectural Museum of Art
Lee Ufan

2022.12.13 Tue. — 2023.2.12 Sun.



Photo© Lee Ufan, photo: Shu Nakagawa

自己は有限でも外部との関係で無限があらわれる。

表現は無限の次元の開示である。

————— 李禹煥

展覧会概要

国際的にも大きな注目を集めてきた「もの派」を代表する美術家、李禹煥（リ・ウファン、1936年生）の待望の日本での大規模な回顧展を開催します。

東洋と西洋のさまざまな思想や文学を貪欲に吸収した李は、1960年代から現代美術に関心を深め、60年代後半に入って本格的に制作を開始しました。視覚の不確かさを乗り越えようとした李は、自然や人工の素材を節制の姿勢で組み合わせ提示する「もの派」と呼ばれる動向を牽引しました。また、すべては相互関係のもとにあるという世界観を、視覚芸術だけでなく、著述においても展開しました。

李の作品は、芸術をイメージや主題、意味の世界から解放し、ものどもの、ものとの関係を問いかけます。それは、世界のすべてが共時的に存在し、相互に関連しあっていることの証なのです。奇しくも私たちは、新型コロナウイルスの脅威に晒され、人間中心主義の世界観に変更を迫られています。李の思想と実践は、未曾有の危機を脱するための啓示に満ちた導きでもあります。

本展では、「もの派」にいたる前の視覚の問題を問う初期作品から、彫刻の概念を変えた〈関係項〉シリーズ、そして、静謐なリズムを奏でる精神性の高い絵画など、代表作が一堂に会します。また、李の創造の軌跡をたどる過去の作品とともに、新たな境地を示す新作も出品される予定です。

プロフィール



李禹煥、フランス、アルル、アリスカンにて
2021年 ©StudioLeeUfan / Photo by Claire Dorn

李禹煥（リ・ウファン）

1936年、韓国慶尚南道に生まれる。ソウル大学校美術大学入学後の1956年に来日し、その後、日本大学文学部で哲学を学ぶ。1960年代末から始まった戦後日本美術におけるもっとも重要な動向の一つ、「もの派」を牽引した作家として広く知られている。1969年には論考「事物から存在へ」が美術出版社芸術評論に入選、1971年刊行の『出会いを求めて』は「もの派」の理論を支える重要文献となった。『余白の芸術』（2000年）は、英語、フランス語、韓国語に翻訳されている。50年以上に渡り国内外で作品を発表し続けてきた李は、近年ではグッゲンハイム美術館（ニューヨーク、アメリカ合衆国、2011年）、ヴェルサイユ宮殿（ヴェルサイユ、フランス、2014年）、ポンピドゥー・センター・メス（メス、フランス、2019年）で個展を開催するなど、ますます活躍の場を広げている。国内では、2010年に香川県直島町に安藤忠雄設計の李禹煥美術館が開館している。本展は、「李禹煥 余白の芸術展」（横浜美術館、2005年）以来の大規模な個展となる。

本展の見どころ

西日本では初めての回顧展

「もの派」を代表する美術家、李禹煥の大規模な回顧展は、西日本では初めての開催となります。※本展は2022年8月から国立新美術館で開催された展覧会が巡回するものです。ただし出品作品は一部異なります。

兵庫県立美術館だけで見られる新作を設置

安藤忠雄設計による兵庫県立美術館の建築に合わせ、屋外にも新作が設置されます。

李禹煥が自ら展示構成を考案

本展は、李禹煥が自ら展示構成を考案しました。1960年代の最初期の作品から最新作まで、李の仕事と経過と性格を網羅的に浮き彫りにするものです。本展は、彫刻と絵画の2つのセクションに大きく分かれています。彫刻と絵画の展開の過程が、それぞれ時系列的に理解できるように展示されます。

音声ガイドは中谷美紀さん

俳優の中谷美紀さんがナビゲーターを務める音声ガイドは、なんと無料。お手持ちのスマートフォンで簡単にご利用頂けます。世界各地で李禹煥の作品をご覧になっている中谷美紀さんが、鑑賞ポイントをご案内。作家本人や本展担当キュレーターによる解説のほか、時折、李禹煥と中谷美紀さんとの対話も繰り広げられます。ぜひお楽しみください。

本展の内容

展覧会冒頭に展示されるカンヴァスにピンクの蛍光塗料を用いた三連画《風景 I, II, III》(1968年)は、東京国立近代美術館で開催された「韓国現代絵画展」(1968年)に出品された李の初期の代表作です。蛍光塗料を用いたレリーフ作品《第四の構成 A, B》(ともに1968年)と同様、視覚を攪乱させるような錯視効果を強く喚起する作品です。トリッキーな視覚効果を引き起こすこれらの作品は、1960年代末の日本に興隆していた傾向を反映しています。



《風景 I, II, III》

1968/2015年

スプレーペイント/カンヴァス

各 218.2×291cm

個人蔵(群馬県立近代美術館寄託)

展示風景:「李禹煥 時を往まう」ボンビドゥー・センター=メス、メス、フランス、2019年2月27日-9月30日

©ADAGP, Paris, 2022. ©Centre Pompidou-Metz / Photo Origins Studio

1968年頃から制作された〈関係項〉は、主に石、鉄、ガラスを組み合わせた立体作品のシリーズです。これらの素材には殆ど手が加えられていません。李は、観念や意味よりも、ものと場所、ものと空間、ものとのもの、ものとイメージの関係に着目したのです。1990年代以降、李はものの力学や環境に対しても強く意識を向けるようになり、石の形と鉄の形が相関する〈関係項〉も制作しています。より近年の作品では、環境に依存するサイトスペシフィックな傾向が強まっており、フランスのラ・トゥーレット修道院で発表された〈関係項—棲処(B)〉(2017年)はその典型です。



《関係項》

1968/2019年

石、鉄、ガラス

石:高さ約80cm、鉄板:1.6×240×200cm

ガラス板:1.5×240×200cm

森美術館、東京

Photo by Kei Miyajima



《関係項—棲処(B)》

2017年

石

作家蔵

展示風景:「ル・コルビュジエの中の李禹煥 記憶の彼方に」展、ラ・トゥーレット修道院、エヴル、フランス

2017年9月20日-12月20日

©Foundation Le Corbusier, Photo by Jean-Philippe Simard

2021年、李はフランスのアルルにある古代ローマの墓地アリスカンを舞台に個展を開催しました。礼拝堂内に展示された《関係項－無限の糸》は、鏡のように磨き上げられた丸い大きなステンレスの底面に向かって、上から細い糸が一本垂れ下がる、〈関係項〉シリーズの最新作の一つです。本展では、兵庫県立美術館の地下から2階へと続く螺旋階段に、本作を元にした新作が設置されます。そこでは、安藤忠雄設計による建築空間と作品との響き合いを感じることができるでしょう。



《関係項－無限の糸》

2022年

ステンレス、糸

サイズ可変

作家蔵

展示風景：「李禹煥 レクイエム」アリスカン、アルル、フランス

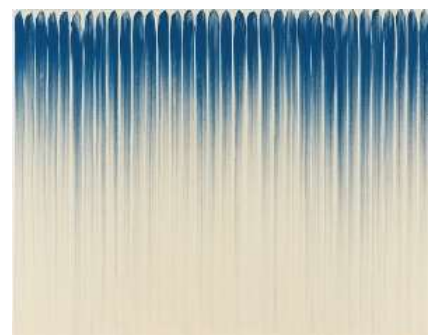
2021年10月30日－2022年9月30日

©Studio Lee Ufan / Photo by Claire Dorn

1971年にニューヨーク近代美術館でのバーネット・ニューマンの個展に刺激を受けた李は、幼児期に学んでいた書の記憶を思い起こし、絵画における時間の表現に関心を強めました。1970年初頭から描き始めた〈点より〉と〈線より〉のシリーズは、色彩の濃さが次第に淡くなっていく過程を表しています。行為の痕跡によって時間の経過を示すこのシステムティックなシリーズは、10年ほど続けられます。



〈点より〉
1977年
岩絵具、膠／カンヴァス
182×227 cm
東京国立近代美術館



〈線より〉
1977年
岩絵具、膠／カンヴァス
182×227 cm
東京国立近代美術館

1980年代に入ると、〈風より〉と〈風と共に〉のシリーズに顕著なように、画面は荒々しい筆遣いによる混沌とした様相を呈してきます。80年代終わり頃からはストロークの数は少なくなり、画面は次第に何も描かれていない空白が目立つようになります。2000年代になると、〈照応〉と〈対話〉のシリーズが示すように、描く行為は極端に限定され、ほんの僅かのストロークによる筆跡と、描かれていない空白との反応が試されます。〈点より〉や〈線より〉と対照的に、これらは空間的な絵画のシリーズと言えます。



〈風より〉
1985年
岩絵具、油／カンヴァス
227×182 cm
豊田市美術館



〈応答〉
2021年
アクリル絵具／カンヴァス
291×218 cm
作家蔵

音声ガイド

音声ガイドナビゲーターは、ドラマや映画など多方面で活躍する俳優の中谷美紀さんが務めます。中谷さんのメッセージは以下の通りです。

「この上なくシンプルな点や線、そして石や鉄板などで表される李禹煥さんの作品は、溢れた物や情報に埋もれて息苦しく感じている現代に生きる私たちの心身を解き放ってくれます。俗に言う肖像画や静物画、風景画などは一切ありませんが、点や線の周囲に贅沢に残された余白こそが饒舌に語りかけてくるような気がしています。私にとって李禹煥さんの静かで厳かな作品は、心の拠り所であり、少しがんばりすぎたり、急ぎすぎた際に、ふと立ち止まって、自らを省みるための鏡のようでもあります。これらの作品群を鑑賞する際に、決して正解はありません。ご覧になる方が思い思いに作品と向き合い、対話し、斜めから眺めてみたり、かがんで見上げてみたり、時には彫刻作品の上を歩いてみたりすることで、これまで生育過程や社会で植え付けられてきたステレオタイプな価値観を疑ってみる機会となるのではないのでしょうか？」

▽音声ガイドは無料、スマートフォンで利用できます

中谷美紀さんによるご案内のほか、李禹煥ご本人による作品解説、本展担当学芸員による解説を収録しています。

ナビゲーター：中谷美紀（俳優）

作家解説：李禹煥

キュレーター解説：米田尚輝（国立新美術館主任研究員）、小林公（兵庫県立美術館学芸員）

収録時間：約 30 分

※イヤホンやヘッドホンをお持ちください。

※ガイドのご利用には無料 Wi-Fi への接続かデータ通信が必要となります。

※ご希望の方には、音声ガイド機の貸出もあります。但し、台数には限りがございますので、お待ちいただく場合がございます。

<プロフィール 中谷美紀>

1976年1月12日生まれ。東京都出身。1993年に俳優デビュー。『壬生義士伝』（03/滝田洋二郎監督）で日本アカデミー賞優秀助演女優賞、『嫌われ松子の一生』（06/中島哲也監督）で同賞最優秀主演女優賞、『自虐の詩』（07/堤幸彦監督）で同賞優秀主演女優賞、『ゼロの焦点』（09/犬童一心監督）で同賞優秀助演女優賞、『阪急電車 片道15分の奇跡』（11/三宅喜重監督）で同賞優秀主演女優賞、『利休にたずねよ』（13/田中光敏監督）で同賞優秀助演女優賞を受賞。2011年に初舞台「狷銃」で紀伊國屋演劇賞個人賞、読売演劇大賞優秀女優賞、2013年の「ロスト・イン・ヨンカーズ」では読売演劇大賞最優秀女優賞を受賞する。

「オーストリア滞在記」（幻冬舎文庫）など書籍の執筆活動も手掛ける。

インスタグラム @mikinakataniofficial



李禹煥と中谷美紀 2022年6月撮影 撮影：伊藤彰紀

関連イベント

展覧会会期中には李禹煥氏と各界識者による対談を予定しています。詳細は兵庫県立美術館のHPで随時発表いたします。

同時開催の展覧会

2022年コレクション展II

特集1「リ・フレッシュャーズ—新収蔵品紹介展」

特集2「没後50年 吉原治良のミクロコスモス小宇宙」

—12月18日（日）

2023年コレクション展I

特集1「コレクション名品選」（仮題）

2023年1月21日（土）—7月23日（日）

特集2「中国明清の書画篆刻—梅舒適コレクションの精華—」

2023年1月21日（土）—4月9日（日）

[横尾忠則現代美術館]

開館10周年記念展 横尾さんのパレット

—12月25日（日）

開館10周年記念 横尾忠則展 満満腹腹満腹

2023年1月28日（土）—5月7日（日）

開催概要

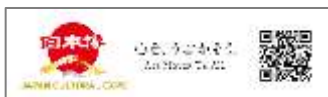
兵庫県立美術館開館 20 周年記念

李禹煥

20th Anniversary of Hyogo Prefectural Museum of Art

Lee Ufan

会期	2022年12月13日(火) - 2023年2月12日(日)
開館時間	10:00-18:00 ※入場は閉館の30分前まで
休館日	月曜日、年末年始 [12月31日(土) - 1月2日(月)] ※ただし1月9日(月)は開館、1月10日(火)は休館
主催	兵庫県立美術館、朝日新聞社、独立行政法人日本芸術文化振興会、文化庁
協力	SCAI THE BATHHOUSE
協賛	公益財団法人伊藤文化財団
助成	一般財団法人安藤忠雄文化財団
特別協力	公益財団法人日本教育公務員弘済会 兵庫支部



令和4年度日本博主催・共催型プロジェクト

観覧料

	当日	前売
一般	1,600 円	1,400 円
大学生	1,200 円	1,000 円
高校生以下	無料	
70 歳以上	800 円	—
障がいのある方 (一般)	400 円	—
障がいのある方 (大学生)	300 円	—

- ・前売は一般、大学生のみ。
- 前売販売期間：10月1日(土) - 12月12日(月) (会期中は販売しません)
- ・一般以外の料金でご利用される方は証明書を観覧当日ご提示ください
- ・障がいのある方1名につき、介護の方1名無料
- ・コレクション展は別途観覧料が必要です (本展とあわせて観覧される場合は割引があります)
- ・予約制ではありません。混雑時は入場制限を行いますのでお待ちいただく場合があります
- ・団体鑑賞をご希望の場合は1ヶ月前までにご連絡ください

■主なチケット販売場所

ローソンチケット (Lコード：51645)、チケットぴあ (Pコード：686-203)、セブンチケット (セブンコード：096-988)、楽天チケット、イープラス、CN プレイガイドほか

■交通案内

阪神岩屋駅 (兵庫県立美術館前) から徒歩約 8 分

JR 神戸線灘駅南口から徒歩約 10 分

阪急王子公園駅西口から徒歩約 20 分

JR 三ノ宮駅南から神戸市バス (29・101 系統) にて約 15 分、「県立美術館前」下車すぐ地下駐車場 (乗用車 80 台収容・有料)

※ご来館はなるべく電車・バスをご利用ください




広報画像申込書

本展では、オンラインでご利用いただける、広報用ダウンロードシステムをご用意しております。本リリースに掲載している画像のうち以下の図版については、下記のURLにアクセスしていただきお申込みください。（初回のみ新規ご登録が必要です。）

https://www.artpr.jp/hyogo_pref_museum_of_art/leeufan2022



<p>1</p>  <p>展覧会ポスター</p>	<p>7</p>  <p>《線より》 1977年 岩絵具、膠/カンヴァス 182×227cm 東京国立近代美術館</p>
<p>2</p>  <p>李禹煥、鎌倉にて、2022年 Photo©Lee Ufan, Photo by Shu Nakagawa</p>	<p>8</p>  <p>《点より》 1977年 岩絵具、膠/カンヴァス 182×227cm 東京国立近代美術館</p>
<p>3</p>  <p>《風景 I, II, III》 1968/2015年 スプレーペイント/カンヴァス 218.2×291cm 個人蔵（群馬県立近代美術館寄託） 展示風景：「李禹煥 時を住まう」ボンビドゥー・センター =メス、メス、フランス、2019年2月27日-9月30日 ©ADAGP, Paris, 2022. ©Centre Pompidou-Metz / Photo Origins Studio</p>	<p>9</p>  <p>《風より》 1985年 岩絵具、油/カンヴァス 227×182cm 豊田市美術館</p>
<p>4</p>  <p>《関係項》 1968/2019年 石、鉄、ガラス 石：高さ約80cm、鉄板：1.6×240×200cm ガラス板：1.5×240×200cm 森美術館、東京 Photo by Kei Miyajima</p>	<p>10</p>  <p>《応答》 2021年 アクリル絵具/カンヴァス 291×218cm 作家蔵</p>
<p>5</p>  <p>《関係項—棲処 (B)》 2017年 石 作家蔵 展示風景：「ル・コルビュジェの中李禹煥 記憶の彼方に」展、ラ・トゥーレット修道院、エヴー、フランス、 2017年9月20日-12月20日 ©Foundation Le Corbusier, Photo by Jean-Philippe Simard</p>	<p>11</p>  <p>李禹煥、フランス、アルル、アリスカンにて、2021年 ©Studio Lee Ufan / Photo by Claire Dorn</p>
<p>6</p>  <p>《関係項—無限の糸》 2022年 ステンレス、糸 サイズ可変 作家蔵 展示風景：「李禹煥 レクイエム」アリスカン、アルル、 フランス、2021年10月30日-2022年9月30日 ©Studio Lee Ufan / Photo by Claire Dorn</p>	<p>12</p>  <p>李禹煥、フランス、アングレームでの《関係項—星の影》設置作業、2021年 Photo©Lee Ufan</p>

【 画像使用に際しての注意事項 】

- 「作家名」「作品名」「制作年」「展覧会名」「所蔵先」「クレジット」などを明記してください。
- 作品画像の加工（着色、トリミング、文字載せなど）はできません。
- 基本情報、画像使用の確認のため、ゲラ・原稿の段階で「企画・広報担当」までお送りくださいますようお願いいたします。
- 掲載媒体を1~2部、もしくはURL、同録（DVD、CD）を「企画・広報担当」宛にお送りください。
- 画像使用は本展覧会の紹介用のみとさせていただきます。（会期終了まで）
- 再放送、転載など二次使用をされる場合には、改めて申請をお願いいたします。

兵庫県立美術館 取材申込書

取材をご希望の方は下記にご記入のうえ、
取材希望日の**3営業日前まで**にメールまたはFAXにてお申し込みください。

メール送付先 : press@artm.pref.hyogo.jp

FAX送付先 : 078-262-0903

お申込日	年	月	日
------	---	---	---

<< 取材内容 >>

希望日時	第1希望	年	月	日 (曜)	時	分	～	時	分
	第2希望	年	月	日 (曜)	時	分	～	時	分
	第3希望	年	月	日 (曜)	時	分	～	時	分
希望場所									
企画内容									
カメラ撮影	<input type="checkbox"/> あり	スチール	台	ムービー	台	三脚・脚立	台		
	<input type="checkbox"/> なし								
取材人数	人								
取材時の代表者名									
媒体種別	<input type="checkbox"/> テレビ	<input type="checkbox"/> ラジオ	<input type="checkbox"/> 新聞	<input type="checkbox"/> Web	<input type="checkbox"/> その他 ()				
媒体名									
掲載・放送予定日時	<input type="checkbox"/> 掲載	年	月	日 (曜)	時	分			
	<input type="checkbox"/> 放送	年	月	日 (曜)	時	分			

ご連絡先	担当者名	
	社名・部署名	
	住所	
	電話番号	
	FAX	
	E-Mail	

* 企画内容によってはご要望に沿えない場合もございますので、あらかじめご了承ください。

* 作品の著作権保護や出展作品のクレジット確認等のため、展示風景や作品の画像使用にあたっては、紙面掲載、番組放送前に 原稿を確認させていただきます。

おります。校正段階での原稿・映像等を事前に広報専用メールへご提出ください。

* 掲載媒体を1~2部、もしくはURL、同録 (DVD、CD) をお送りください。

〈取材についてのお問い合わせ〉

兵庫県立美術館 企画・広報担当 (政岡・東原・成松)

〒651-0073兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1

TEL : 078-262-0905 FAX : 078-262-0903 Mail : press@artm.pref.hyogo.jp